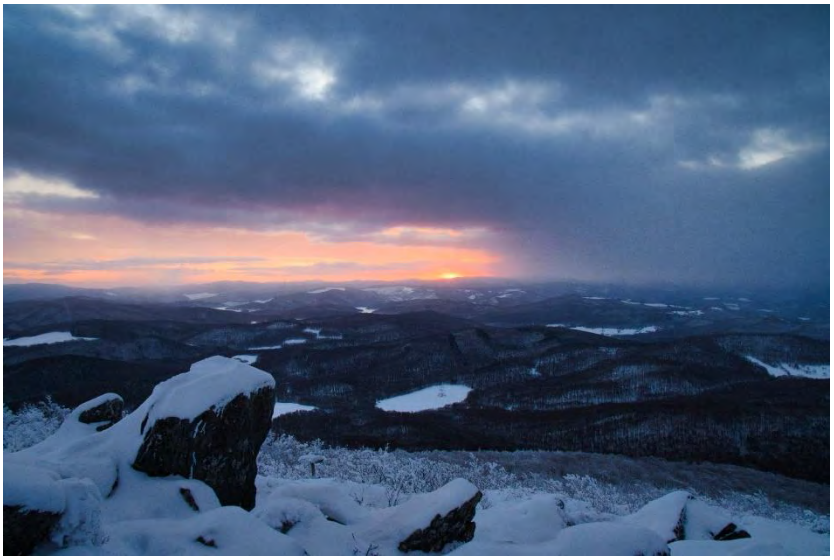
IWATE
SECTION OF
THE JAPANESE
ALPINE
CLUB

JAC岩手支部通信 第54号

(公社)日本山岳会岩手支部

発　行 2022年3月25日
発行者 阿部陽子
事務局 高橋勇一
盛岡市下田字古河川原20
mail：iwt@jac.or.jp



令和4年1月2日　盛岡市　姫神山

目　　次

巻頭言 ・・・・・・・・・・阿部陽子　1
令和3年度支部総会
　議事要約・・・・中屋重直　1
例会山行
　4月 六郎山、台羽山・・・高橋　耕　2
　5月 砥森山・・・・・・・滝浦弘美　3
　6月 茅森山・・・・・・・中屋重直　3
　7月 四角岳、中岳・・・・高橋勇一　4
　8月 サンボトジ頭・・・熊谷加奈子　5
　9月 千沼ヶ原・・・・・・森美枝子　5
　10月 加呂森(中止)
　11月 片羽山　雄岳・・・・阿部陽子　6
　12月 水上山・・・・・・・阿部陽子　6
山岳古道調査経過報告・・・・中屋重直　7
第4回　山の公開講座・・・・高橋勇一　7
初めてのボッカ大将・・・・・鳩岡美波　8
岩手山八合目避難小屋当番・・澤口　誠　9
入会ご挨拶
　後藤克裕　10
　佐々木真美　10
　新川正治　11
追悼　鹿野松男さん・・・・・渡邊博厚　12
訃報　近藤有慶さん・・・・・・・・・　14
編集後記・・・・・・・・・・高橋勇一　14
山行の一コマ　・・・・・・・・・・・・　15

巻　頭　言

支部長　阿部陽子

国民の休日「山の日」制定を記念して一般公募ふるさとの山を登ろう、の企画があった平成28年に私は支部長に就任した。岩手支部に新会員が入り始めたのはその頃からであり、以後５年間で約30名の会員獲得である。それも山岳経験・年齢性別など多彩になって、会員歴の古い先輩が今の例会に見えると一様にびっくりされている。これは一時的な登山ブームではなく、こうしなければ遠からず山岳会活動が成り立たなくなり、支部の消滅を余儀なくされる状態（隣県などの他支部に顕著）に危機感を抱いて、複数の会員が一般への勧誘を真剣に取り組んだ結果だ。事実昨年度は退会が入会者数を上回った。そんな退会の理由を調べたのか、と一部の会員から詰問されたが、把握した事情は様々で、多くは高齢によるものであった。闘病中に励まし続けた先輩が亡くなった例、家庭の変化のため、コロナ感染予防で、というケースもあり、単純に引き止めた方がよいとは言い切れない。

次に、登山技術の向上ならびにリーダー養成についてである。昨年12月の拡大委員会において、スマホを使った読図の講座を実施して欲しいとの要望があったので、本年度事業に組み入れた。講師は若手会員三人が担い、一般にも公開して、本部の特別事業（会員拡大・会員資質向上）補助金を申請して承認された。8月に実施予定だったが、県独自の緊急事態宣言の影響で9月に延期し、別稿のとおり成功裡に終えた。スマホの地図に軌跡が得られるほか、現在地が留守宅家族にオンタイムで通知される「みまもり機能」の活用など、進化するスマホを上手に使いこなせれば遭難防止の有用な機材となる。

支部通信は昨年まで年２回発行してきたが、前号（3月末発行）の編集に時間的余裕がなくなり、多大な無理を強いた反省から、今年度は１回限りの発行とさせてもらうことで承認されている。したがって、12月くらいまでの出来事で本号は編纂されている。新しい編集メンバーには、昨年入会した志田会員をあてた。役所の広報誌を作ってきた経験者なので、その特異な能力を発揮してもらおうと思った次第である。

特記すべきは、近藤有慶さんが例会に連続して参加されたことだ。安全登山の基本となる下見やロープ技術を共有することができ、豊かな山行になった。引きつづき新旧会員の交流の場にしていきたいと思う。

令和３年度　支部総会　議事要約

中屋重直

新型コロナ感染拡大のさなか、恒例の懇親会を中止したことから、会場を上田公民館に久しぶりに戻して、4月4日（日）午後から支部総会を開催した。出席18名、委任状提出36名である。

高橋耕会員を議長に選出し、事業活動報告（高橋勇事務局長）、会計決算報告（遠藤）、監査報告（熊谷英）を承認し、今年度事業計画を次のように提案した。

１．総会、委員会を開催する。
２．公益事業を兼ねる月例山行を続ける。
３．三役会議、編集会議を随時行う。
４．支部通信の発行。現状は負担が大きいので、年１回の発行としたい。
５．岩手県山岳協会への協力
　岩手山８合目避難小屋管理と荷上げへの参加、各種講習会への参加。
６．一般公募「スマホを使った読図講習」の開催
７．日本山岳会120周年記念山岳古道調査への準備
８．その他　会員獲得、支部の目的にかなう活動

全国では活動の自粛が広がっているにもかかわらず、岩手支部は「県外への移動や忘年会等の中止」としただけの縮小にとどめ、山行を盛況に行う方針である。

この事業計画は満場一致で決定された。(委員会では苦言を呈する意見あり)

予算案について、支部長ほか事務局の手当を3,000円から年5,000円×5名に変更する。

委員に高橋時夫会員を任命する。

出席の新入会員志田順悦さんと準会員和泉由美さん、ならびに会員移行の齋藤忠利さんを支部長が紹介した。

「スマホを使った安全登山講座」計画について特別事業委員会の補助金申請を行なっているとの説明があった。

山岳古道調査に「巌鷲古道」「子規古道」を推薦したと説明（関連後述)。

支部通信第53号は「3月中の発行が無理で総会終了後の発送になる」と弁明する予定だったものを、編集担当が無理を押してこの日に間に合ったという状況が説明された。

例会山行「六郎山・台羽山」

高橋耕

●令和３年４月24日(土)

参加者は阿部支部長を始めとする１０名で、リーダーは中屋副支部長にお願いしました。

午前８時３０分、旧花巻温泉病院バス停前に集合し、３台の車で台温泉に移動して、六郎山に向けて登山開始。晴天の中、登りやすい登山道が続き、植物も豊かです。かたくり、ショウジョウバカマその他多数で、撮影しながら登る楽しい行程です。

１０時過ぎ、六郎山頂上に至り、暫く休憩を取った後、登山道がほぼ見当たらない尾根づたいに台羽山に向かいました。雑木の葉もまだ生い茂ってないので、比較的歩き易い行程でした。目印の赤いリボンが目に付きます。尾根をカーブするところではスマートフォンの地図を見ながら歩いているメンバーもおり、自分のスマートフォンの地図を見ても詳しい地形は出ないので尋ねたところ、「ＹＡＭＡＰ」というアプリの存在を教えてもらいました（調べたら有料なんですね)。

１２時４５分に台羽山頂上に到着しました。羽山神社の奥宮と紹介している人もいますので、その神様が住む山なんでしょうね。下りの道路は参拝する人も多いのか広い道路が整備されています。１３時２０分には集合場所のバス停前に到着しました。

５時間近くになる山行で、快適な登山道や道がはっきりしない尾根歩きもあって、我が会に相応しい行程でした。一昨年が万寿山、昨年はコロナ禍で有志だけの小桜山、堂ケ沢山への４月の山行でしたが、この一帯の山々は標高は高くはありませんが、人を寄せ付けようとしないような小桜山、結構険しいこともある万寿山、穏やかな六郎山など多彩です。温泉も近く、私自身は今回は花巻温泉に前泊しての山行で目に焼き付くような満開の桜が見事でした。温泉付の山行は最高ですね。

参加者10名：幹事=高橋耕・阿部陽子
中屋重直・森美枝子・澤野沙織・齋藤忠利
近藤有慶・高橋瑞穂・川村和也・熊谷加奈子

例会山行「砥森山」
滝浦弘美

●令和３年５月９日(日)

県の中央部花巻市東和「田瀬湖」の頭上にそびえる砥森山、南峰648m、北峰670mの二峰の山で方向により三峰変化する。砥森山について、阿部支部長の「岩手の山150」の中に動物の頭に耳が立っているような山で双耳峰と記載されている。国道107号線の白土地内から双耳峰と三峰？が眺望できる。田瀬の歴史の中に砥森山の「砥」について年代は明らかでないが砥石が採石されたことから「砥森山」と命名されたと記載されている。現在においても砥石を発見されることもあると言われている。

また、砥森山登山口の案内看板に安倍貞任一族が隠れ住み祈願したがこれを追う源義家も砥森山に登り捜索祈願したと記載されている、南峰山頂と登山口近くに砥森神社があり鎮守の森と言われている。

戦後、北上川総合開発により北上川最大の下流、早池峰山麓から北上川まで約88㎞の「猿ヶ石川」に、昭和29年に「田瀬湖」が完成しその湖面に四季折々に砥森の山を写し出している。

その砥森山に、令和３年５月の例会登山を実施した、登山口の駐車場で阿部支部長挨拶の後、天候は曇り、登山者11名で田瀬湖側のコースを登る。登山口には案内看板あり林道から林の登山道をしばらく登る倒木等があるも伐採され整備されていた、6合目付近からやや急になり稜線に取り付く、尾根からさらに急登になり一休みしながら直線的な登山道を露石に注意して登ると目の上に砥森山南峰(648m)の石組の上に砥森神社塔や長さ５m程の奉納剣が祀ってある山頂に到達する。天候が良ければ山頂からは田瀬湖を取り巻く山々と遠くは焼石岳や夏油スキー場が眺望できるが曇って見えず残念であった。眼下の田瀬湖は少し見え疲れをいやしてくれた。

さらに、北峰670mに進むが南峰山頂からは登山道が無いので小枝の尾根を下ると南峰と北峰の間の浅い鞍部を経てやや急な尾根を少し登る。田瀬湖側からの赤マーキング付いた登山道を登ると、北峰670mの二等三角点の山頂砥森山に到達した。山頂は平坦な林の中で国土地理院の砥森山表示があり展望は悪かった。山頂で昼食をとり南峰下を迂回して下山すると南峰の登山コースに合流して登ったコースを下山した。今回、天候が悪く山頂からの田瀬湖等は展望できなかったが、砥森山は田瀬湖を展望し春、夏、秋、冬と四季折々の風を受けながら登山できる里山と思った。

参加者11名：幹事=滝浦・森・高橋(瑞)
阿部(陽)・澤野・高橋(勇)・近藤・中屋
斎藤　一般：及川・館洞

例会山行「茅森山」
中屋重直

●令和３年６月13日(日)

茅森山は地味な山である。参加者の全員が未踏という少し珍しい山域であった。場所はよく知られた八方山の北東に対峙し、天ケ森（807m）の南東尾根の途中にある。その地形図を丁寧に読んで、事前に下見を行って登山計画を立てた。瀬の沢川沿いの上山口林道を使うこととし、乗用車でどこまで入ってよいかを管轄の南部森林管理署（奥州市）に問うたところ､「トラックの往来が多いので休日以外は通行を控えるよう」との注意を受けた。なお、特にイベントを伴わない登山が目的ならば入林届は不要とのことだった。

６月13日は日曜であり伐木・集材の作業はなく、高村光太郎山荘入口からおよそ２㎞進んで広い土場に駐車した。なお、岩手山８合目避難小屋へのボッカ行事と重なり、支部の

力自慢の男女多数が抜けた結果、メンバーは6名の編成であった。

登山開始しようとした斜面のすぐ上方に重機路を阿部支部長が発見し、おかげで藪に突入せずに済んだ。その路上にはクマの大きな足跡が新しかった。重機の道をある程度たどったところで尾根に取りついて、読図しながらだんだんに急になった斜面を慎重に登った。当然ながら現在の伐木現場は高いところにはなく、最近に人が通った様子はなかった。午前10時半に山頂到着である。

下山は、ほぼ登路を戻ったが、分岐の先の様子を少し探った。最後、四等三角点（蜂神沢）を探るべく全員で深いササヤブ道へ進んだ。これを通過できれば駐車地点より少し上の林道に降りられるからである。

この藪の中に耳から小さな落し物をするハプニングが発生。GPS軌跡をとっているので、その通りに引き返してしっかり発見し回収できた。

13時前に下山した。

参加者6名：幹事=中屋重直・近藤有慶
阿部陽子・滝浦弘美・今田実・齋藤忠利

例会山行「四角岳、中岳」

高橋勇一

●令和3年7月11日(日)

「四角岳」その山の存在を知ったのは IBCラジオ「いわての山トレッキングガイド」を聴いたことがきっかけだったと記憶しています。そのころはまだ山を始めて間もない頃でラジオで聞いた内容もほとんど覚えていないのですが「北東北三県にまたがる山」ということが脳裏に焼き付いておりました。

今回の山行では四角岳とあわせて中岳にも登ることになりました。こちらの山は地域により「なかだけ」、「ちゅうだけ」と呼ばれているようです。

今回担当幹事となり、山行計画をするにあたって八幡平市安代側からの入山を考えたわけだが、登山口までの道路や駐車場は整備されていないようであった。単独で行くのであれば駐車場所はどうにでもなるが、会の山行での一番の問題はやはり駐車場所。ということで実は偵察に二度行った。はじめは一人で行くつもりだったが、久慈市の山友さんから連絡が入り二人で行くことになった。

この日の目的は、登山道の様子と三県境がどのような感じになっているのかを探ることだった。

一部には藪ありとネットへの書込みもあったが 2019 年 7 月の例会山行の高檜能山での藪漕ぎを経験してしまうと、大抵の藪山は藪と感じなくなってしまう。高檜能山も同じく近寄り難い山ではあるが、登ったことのない JAC 会員にはぜひ登ってみてほしいと思う。

二度目の偵察は駐車場所の確認で行くことにした。このときはスマートフォンアプリの「ジオグラフィカ」を使い駐車できそうな場所にマーキングをし、おおよその駐車可能台数をメモに入力しマーキングしていった。

山の様子については阿部支部長の著書でも紹介されているので、ここでは省略させていただきますが、中岳の山頂直下はなかなかの急登ではあるが一等三角点を有するだけの事はあり、晴れていれば360度の景色を楽しむことができると思います。また、秋の紅葉の時期にも訪れてみたいと思いました。

参加者15名：幹事=高橋勇一・阿部陽子
中屋重直・澤口誠・熊谷加奈子・澤野沙織
森美枝子・高橋瑞穂・滝浦弘美・齋藤忠利
今田実・志田順悦・鳩岡美波・久保豊
箱崎利一(一般)

例会山行「サンボトジ頭」
熊谷加奈子

●令和３年８月１日(日)
(下見編)

宮古市の地図を開くとカタカナで、しかも頭付きの山の名前がある。以前から気になっていたが、ついに登りました。茂市、老木、腹帯に股がり三方向から登る事ができ、頂上で閉じると言うのが､山名の意味らしいです。

はっきりとした登山道はなく、林道、作業道を利用して登るので、楽勝と思いきや、荒れて歩きにくく、所々崩落箇所あり、ジグザグに入りくんだ道は、どこをどう行けば、尾根に取り付けるのか、全く見当も付かない。じっと、山を眺め、ショートカットに決定。「ここを行こう❗」と支部長の一声で､ヤブの中へ突入。見た以上に急斜面、ズスズスと脆く、くずれる足場。つかまるに、つかまれないチクチク､イガイガのイバラの枝､枝､枝。背丈以上の草の中に頭を突っ込み、掻き分け掻き分け進む。汗が目にしみ、傷にしむ。でも、何故か、楽しくワクワクする。

尾根に取っ付き地図とスマホをみながら、要所、要所に赤布を付け尾根を歩きます。緑一色の中を感動しながら、今まさに歩いただろう熊のオッキな足跡にビビりながら､暑さの中､通り抜ける風に癒されながら、やっと辿り着いたサンボトジの頭、二等三角点に感動のタッチです。

ちょっとワイルドな山歩きを楽しみながら、本番用ルートを見つけ､充実した１日でした。

(本番編)

本番では、蒸し暑さの中、何事もなく皆さんで楽しく歩く事ができとても嬉しく思っています。

下山後のロープワークは､頭の中が､「とつこ・もつこ」になりながらも有意義なワンポイントレッスンとなりました。

そして、滝沢スイカ。歩いた後の渇いた喉に染み渡る甘くて美味しいスイカでした。
今回は、登山振興事業で一般の方２名に参加していただき、繋がりの輪がさらに広がればと思っています。

低山の里山ではありますが､難しさもあり､この山に登る為に、支部長初め、皆様には、種々な形で、ご協力を頂き深く感謝を申し上げます。

参加者13名：幹事=熊谷加奈子・滝浦弘美
阿部陽子・中屋重直・近藤有慶・澤口誠
森美枝子・高橋瑞穂・齋藤忠利・今田実
鳩岡美波　(一般)柳渡広子・熊谷徳明

例会山行「千沼ヶ原」
森美枝子

●令和３年９月12日(日)

はじめに

平ヶ倉登山口７時30分集合～8時スタート～平ヶ倉沼～分岐と連絡したため、集合時間前に到着して準備した方と、8 時スタートに間に合えばいいと 7 時 45 分到着の方と誤差が生じてしまいました。今回の教訓、集合時間のみ提示すべきでした。反省・・・

あいにくの雲空の中、元気にスタート。
草刈りなどで整備された歩きやすい路を気持ち良く進んで行きます。ところが、急登を登りきる手前のところで急な土砂降り。

支部長判断で無理に行動せず、その場で様子を見る事に。雲の動きと状況を把握しての指示は凄いです。勉強になりました。

程なく小降りになり、再始動。千沼ヶ原に着く頃には雨も上がっていました。

濡れた木道でしりもちを着くハプニングもありましたが雄大な景色と賑やかなランチに心癒され、今回も楽しい山行となりました。参加の皆様、ご協力ありがとうございました。

参加者８名：幹事=森美枝子・阿部陽子
中屋重直・滝浦弘美・高橋瑞穂・今田実
熊谷加奈子・齋藤忠利

※令和３年10月16日(土)に予定されていた例会山行「加呂森」は登山口までの作業路が車で１時間以上かかる悪路であり、山行当日は雨天が予想されたことから幹事の判断により中止とした。幹事：澤口誠

例会山行「片羽山　雄岳」
阿部陽子

●令和３年11月14日(日)

片羽山へのアクセスは、遠野から笛吹峠を越えて釜石に入る。一旦、遠野運動公園に集合し、車を乗りあわせて青ノ木川沿いの登山口へ向かった。数年前に整備された駐車場は、10台ほど止められそうだ。

奥の大鳥居をくぐり、落葉を踏みしめながら片羽山の山頂を目指す。途中で風力発電風車群のスリーグリーンラインを眺めたり、三等三角点を探査したり、２時間で山頂に立った。

小さな神社と二等三角点を設置した標高1313mの山頂は、360度の大展望である。森林限界を超えており、遮るものは何もない。北上山地を構成する山々が眼下に広がり、釜石湾には白い釜石観音も見て取れる。冷たい風が吹きつけ、長居はできなかった。釜石鉱山として鉄の産業を支え続けた片羽山は、今も昔も天下一品の絶景を誇っている。

●参加者12名：幹事=澤野・阿部陽・中屋
久保・中村・高橋勇・高橋瑞・森・滝浦
齋藤・熊谷加・照井(会員外)

例会山行「水上山」
阿部陽子

●令和３年12月11日(土)

草井沢集落の南側の電力巡視路を利用して近づき、標高 492mの水上山に登頂した。近年の伐採により西の展望は良好だった。堂々とそびえる塚瀬森は特定できたものの、回りに連座するピークの同定は難しい。

水上山からさらに古い林道と並行する北側の藪尾根へと進んで、二等三角点のある標高561.3mに到達した。北方には、電波塔が並ぶ新山、奥に東根山と西東根山が見えるなど、無風晴れの山日和であった。

12月は泊まりで忘年会を開催し、忘年山行と拡大委員会(次年度の山行計画を話合う)を実施していたが、本年度はコロナ禍２年目であることから「日帰り山行と次年度に登りたい山」を提案してもらうこととした。皆さんの要望は、令和４年度の山行計画(案)に反映したいと思う。

●参加者14名：幹事=熊谷英・澤口・阿部陽
中屋・熊谷敬・高野・森・高橋時・高橋瑞
熊谷加・幅下・滝浦・齋藤・照井(新会員)

山岳古道調査経過報告

中屋重直

本部プロジェクトから第一次調査対象に選定された**秋田街道**について今年度は文献と地図での検討を行なった。雫石側からは貝吹岳への道を使って仙岩峠へ登るが、仮に国見温泉まで車で行って、直接国見峠に達するルートも可能である。生保内への秋田県の道は残雪が消えてからが良いとのアドバイスがあり、令和４年５月28日に**岩手・秋田支部合同**で踏査する計画で調整している。

次に第二次選考で仙北街道が選ばれた場合に備えた計画をしている。ルートは、奥州湖（胆沢ダム）上流から小胡桃山、大胡桃山を登って柏峠を経て秋田県東成瀬に抜ける長い道だが、近年は道標が多くつけられているので、一気通貫ではなく数回に分けて月例山行に組み入れることにする。

他に**子規古道（笹峠、黒森峠）**、および八幡平市の岩手山旧上坊登山口の**巌鷲古道**についても岩手支部独自の計画に組み入れたいと思う。（12月23日）

第４回　山の公開講座

高橋勇一

●「登山ナビゲーション・スマホで読図」

開催日：令和３年９月26日(日)

会　場：宮古市区界「区界高原ｳｫｰｷﾝｸﾞｾﾝﾀｰ」

※令和３年８月28日(土)開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響により会場が閉鎖となったため延期して開催した。

令和３年度の特別事業としてスマートフォンを使った読図講習会を行った。山岳遭難の原因の約40％以上が道迷いといわれている。前回の特別事業では紙地図とコンパスを使った「登山ナビゲーション読図講座」を行ったが、我々会員も含めてまだまだ多くの登山者は読図の知識が欠けていると言えると思います。そのような経緯もあり、いまでは多くの人が所有しているスマートフォンを使った読図講習会を開催することになりました。

今回はコロナ禍ということもあり、チラシを配布するなどの募集は行わずJAC会員と会員の知人、友人のみで開催した。

講習会の内容は、一日間で午前中に座学、午後に野外での実技を行った。

座学の内容については、まず川村会員が、スマートフォンがGPSを使いどのようにして現在地を測位するのかなど、スライドを使い説明した。このスライドは講師自らが作成したものだが、非常に素晴らしい内容のものであったと感じた。

次に私がスマートフォン用地図アプリ「ジオグラフィカ」の説明を行った。まずはアプリでできる代表的なことを説明し、次にスマートフォンの画面をスクリーンに映し出して操作方法を確認しながら説明を行いました。

座学の最後には澤口会員が登山者に一番多く使われているアプリ「YAMAP」の説明を行った。今回の参加者もこのアプリはほとんどの人が使っていることもあり、このアプリの機能のひとつ「みまもり機能」についての説明を行った。この機能は登山中の位置情報を家族や友人などと共有する機能で、ぜひ使ってほしいことを参加者のみなさんにお願いした。

午後からは実際にアプリを使用して兜明神岳で登山を行ったが、参加者のほとんどが「ジオグラフィカ」を使ったことがなかったので、それを使用して登山を行った。

アンケートでは楽しく参加できたという声もありましたが、やはりアプリの使い方などやや難しい部分もあったようでした。

登山にスマートフォンを使うことに対しては賛否両論あるとは思いますが、安全登山につながることであると思いますので、多くの登山者に積極的に使っていただきたいと思います。今後、また同じような講習会ができるかわかりませんが、少しでも山岳遭難を減らす一助になればと願います。

参加者15名：講師（会員）・澤口誠、川村和也
高橋勇一　会員・阿部陽子、中屋重直、
熊谷加奈子、森美枝子、高橋瑞穂、滝浦弘美
新川正治、和泉由美　一般参加・村中英治
柳渡広子、及川修子、及川裕未

初めてのボッカ大将

鳩岡美波

●令和３年６月13日（日）

（一社）岩手県山岳・ｽﾎﾟｰﾂｸﾗｲﾐﾝｸﾞ協会による、岩手山八合目避難小屋への物資の荷上げ「ボッカ大将」が開催されました。

朝６時前、東屋に集合。続々と経験者が集まってくる。荷物が置かれた瞬間、我こそは！と猛者たちが荷物を持っていく。私は軽い気持ちで参加。おこぼれのレトルトの牛丼と親子丼、岩手山の花の本、販売グッズを詰めていざ出発。

重い。今までの登山をする時の荷物の中で一番重かった。いつも長いと感じる0.5合目が、より長く感じる。一緒に歩いたのは、今回女子２位だった瑞穂さん。いつもシャンシャンと登るみずほさんも足取りが重そう。二人でゆっくり歩く中、背後から猛追してくるは勇一さん。ラジオをかけ、軽快に越されてしまった。その後から追いかけるは澤口さん。「頑張ってね！」と爽やかに越されていく。

がんがん照りではないが、季節は６月。動けば暑く、荷物も重く、汗が吹き出る。瑞穂さんはザックを降ろさず挑むようだ。サポートせねば！と動いた。今回は持っていてよかったのは、凍らせたこんにゃくゼリー。疲労困憊でも喉を通る。東屋で頂いた福田パン！袋が膨らんでかさばるし、パサパサになって食べられないんじゃないかと思ったが、すこぶるうまいのだ！！常温で心配だった牛乳と相性バツグン。八合目で食べるはずが、食べきってしまった。

普段は気にならない岩や枝が、行く手を阻む。四合目。岩ばかりで足が上がらない。パッキングがあまく、ザックの上部で本が揺れ動いて歩きにくい。お互い疲労もあり無口になる。その時、またあの爽やかな声が！！澤口さん！風のように去ってしまったが、声をかけてもらえただけで、なんだか頑張れそう。でもすでに頑張っている瑞穂さんに、どう声をかけたらいいのか。すれ違う人たちも声をかけてくれる。声をかけられるだけでこんなにも違うのか。気力を取り戻し、ひたすらに足を進めて、下から押して、声をかけて、花の写真を撮って。

残り時間が迫る。瑞穂さんの気力はすごかった。もう立っているだけでも大変なはずなのにズンズン小屋へ。受付終了約２分まえに到着！！出迎えてくれた人たちを見て感動だ

った。もうつかないと諦めかけたけども、登りきれてよかった。私達が運んだ荷物は、これからこの小屋を守ってくれる管理人さんや、岩手山を訪れる人達の役に立てるのだと思うと、感慨深かった。

今回参加してみて、パッキングの仕方、水分や行動食の選定を学んだ。ザックの詰め方次第で歩容は左右される。もしもへの備えやその日の気候に合わせた行動食は今後の山行に活かしたいと思う。

これだけ大変な思いをして登った岩手山は、山頂に行かなくとも達成感が尋常ではなかった。たくさんの人達の協力があって、山登りが楽しめることに感謝して､重さは関係なく、来年からも参加していきたいと思った。

参加者５名：澤口誠、高橋勇一、熊谷加奈子森美枝子、高橋瑞穂、鳩岡美波

岩手山八合目避難小屋当番

澤口誠

毎年恒例の岩手山八合目避難小屋の小屋当番に行ってきました。

山の予報は良かったが岩手山八合目避難小屋付近はガス。さすが岩手山。今年の日本山岳会の参加者は五人。荷揚げ品を東屋で個々に分けて運びます。今年の荷揚げはガソリン２缶。カップラーメン２箱に半端なカップラーメン数個。塗料。背負子２個。

７：30分登山開始、11：30分八合目避難小屋到着。なんとか無事業務開始前に小屋到着。昼食を急いで食べて販売のお手伝い。ガスで登山者は少ないが、寒いのでカップラーメンやコーヒーなどの温かい食べ物、飲み物がよく売れる。

管理人の指示にて早めの店閉め。早めの夕食は各自持ち寄った食材にて豪華な食事。いつもながらみんなに感謝。20時消灯。二次会と思い外に出るが風も強く寒すぎてすぐ撤退。

翌日発電機始動の音で目覚める。天気の良い予報だったが、濃いガスでご来光行く方は居ない。朝ごはんを食べて、女子は小屋の掃除開始。我々男子は数日前から頼まれていた資材運搬を行う為、平笠不動避難小屋へ行き、鉄筋とガイドロープの資材を背負子で指定個所に運ぶ仕事。諦めていた景色だったが､平笠不動避難小屋への下山途中、きれいな雲海が見られました。

当時平笠不動避難小屋は改装工事中、ヘリで運んだ資材を背負子にくくりつけ登り返し。これがまた重い。息を切らして熊野権現に到着。資材を一升目や不動平避難小屋に振り分けながら業務完了。小屋のトイレ掃除、ペーパーの回収をして八合目避難小屋へ。物品販売してた女子と交代。女子達は山頂へ向かう。

二日目も気温は寒く、カップラーメンが飛ぶように売れる。その他、バッチ、手拭い、Ｔシャツも沢山売れた。時折小雨も降るので小屋の中で昼食される方も多かった。

定時の時間になりみんなでお昼を食べ下山。荷揚げに物品販売に資材運搬に避難小屋掃除などなどコロナで会の参加人数も少ない中、

色々と大変でしたが今年も無事小屋当番が出来たことに感謝。来年も宜しくお願いします。

参加者５名：澤口誠、高橋勇一、今田実
高橋瑞穂、小山田千鶴（一般）

入　会　ご　挨　拶

●会員番号　16581　後藤克裕（盛岡市）

本会へ入会させていただきました事を改めてご挨拶申し上げます。

（７月の鳥海山にて　写真右端が後藤氏）

入会は令和２年１月であります。私は、高校大学と山岳部に所属し、岩手・山形の山を主に夏冬問わずに登りました。その他北アルプスの剣岳が多く、インドヒマラヤへも行っております。現在年齢６８才となり、半世紀も前のことになります。

当時山岳界は海外遠征ブームで、その牽引は日本山岳会でありました。全国の登山団体の頂点にある組織で、日本人初のエベレスト登頂の快挙も日本山岳会でありました。

かねてより憧れの本会へ入会することができまして、大変嬉しく思っております。

皆様とゆっくり山に親しみたいと思っておりましたが、この所どうも左足の疲れが早く、一緒に山行することに躊躇しております。何とか参加できるように体調を取り戻したいと思っております。

自分の足で登り、山の頂点を踏み、そして下るという、山登りの面白みは、全て自分と自然との折り合いの中で行われ、目的を成し遂げたときの喜びがこの上なく素晴らしいこと。そしてその時の仲間とは、絆が太くなり、酒が旨くなるという妙味もまた宜しいのです。

今後共宜しくお願い致します。

入　会　ご　挨　拶

●会員番号　16590　佐々木真美（陸前高田市）

登山の知識も技術も、まだまだ未熟な私が入会しても良いのだろうかと思いましたが、ご縁があり、また、登山技術について学びたいと考え入会させていただきました。

私が登山をはじめたきっかけは、「岳」という漫画だったと思います。山岳救助がメインなので、山の厳しさが描かれており、遭難する人が多々登場するのですが、中には残念ながら助からない人もいます。山は時に命をも奪うという、自然の厳しさを、その度痛感するのですが、それでも助かった登場人物達は、また山に登るのです。山のどこにそんな魅力があるのか、きっと登ってみた者にしか分からないと思いました。ただ、山登りをする知人もいないので、まずは山の雑誌を買いました。山の荘厳で美しい写真を見て、ますます登ってみたくなりました。しかし登るためには、最低限の道具、体力が必要なので、色々準備をして臨みました。インドア派の当時の自分には、なかなかハードルが高かったのです。

そして、ツアーに参加してみたものの、暴風雨で景色も見えず登頂もできずと、散々でした。しかし、その後、山岳会の方と一緒に早池峰山に登る機会があり、ついに山の美し

さを実感する瞬間が訪れました。下は色とりどりの紅葉、上は澄んだ青空の雪景色。こんな風景の中を自分の足で歩いていることに感動しました。そして、山で食べたご飯が美味しすぎて、登ってよかったと心底思い、まんまと魅了され、その後は取り憑かれたように色んな山に登りました。山の澄んだ空気、森林の香り、小鳥の鳴き声、可愛いお花が大好きになりました。登山後の温泉が、今まで味わったことのない特別な癒やしになりました。登山を通して大切な人達との出会いもありました。登山を一生続けていきたいと思いました。

入会はしたものの、家の事情やコロナ禍で全く参加できず、心苦しく思っています。状況が好転し、参加できるのを心待ちにしておりますので、どうぞよろしくお願いします。

入　会　ご　挨　拶

●会員番号 A0286　新川正治(宮古市)

2019 年 12 月に渡邊博厚さんの紹介で準会員になりました、宮古の新川正治（しんかわまさはる）です。

“来春は 60 歳で退職して好きな山歩きができる”と楽しみにしていた 2011 年 3 月、東日本大震災が発生しました。これも天命と思い、震災復興に６年間取り組みました。

2017 年、待ちに待った退職記念登山がスタートしました。私はソロのテント泊縦走登山が好きで、真っ先に残雪とお花畑の大雪山系に出掛けました。旭岳から白雲岳へ、そして高根ヶ原からトムラウシまで続く広大な準平原は、色とりどりの高山植物が咲き乱れ、47 年間勤務のご褒美を頂いたように感じました。

（旭岳・後旭岳・白雲岳）

南アルプスは、大型ザックを担いで 3000m峰の頂きをいくつも超え、満足の 8 日間でした。飯豊連峰は 40 年振りの石転び沢雪渓を登り３県に跨る稜線を歩き、ヒメサユリの大嵓尾根を引き返す充実したコースでした。西穂・ジャンダルム・奥穂縦走は、緊張感の連続がしびれました。３年目は、念願の冬季の赤岳・西穂、雪稜の白馬主稜、前穂北尾根、北鎌尾根にガイド付きで登り退職記念登山は終了しました。

（徳兵衛山から剣ヶ峰、右奥岩手山）

現在はコロナ禍のため、家業の農林業と、国土調査作業員のバイト（次の遠征費と体力維持）をしています。気が向けば、ホームグラウンドの早池峰のバリエーションコース（御山川・薬師川の沢と尾根、積雪期早池峰連峰全山縦走）に出掛けます。やはり早池峰は私にとって一番の山です。

追悼　鹿野松男さん（会員番号6705）

渡邊博厚

自分より若い友の死去を綴るのは辛い、得難き友であり大切な相棒だった。

病気療養中の鹿野松男さんが令和３年４月９日、八戸赤十字病院で逝去された。73歳でした。

初めて鹿野さんに出逢ったのは彼が宮古高校に入学して山岳部に入った昭和38年秋のこと、もう58年も前になる。彼のことを綴るにあたり日本山岳会入会当時の事やトルコ共和国との関わりを思い起こし彼を偲びたい。

鹿野さんの入会は昭和44年４月、まだ21歳の大学４回生になったばかりだった。入会紹介者は深田久弥(日本山岳会副会長)さんと山崎安治(日本山岳会理事)さんでした。「日本百名山」や「ヒマラヤの高峰」の著者でもある深田久弥さんが紹介者に成ってくれたのは、鹿野さんの発案で深田久弥さんの御自宅を訪ねたことから始まった。前年の春、彼が大学のある京都から八戸に帰省の折り宮古に顔を出してくれた。彼とは何かと妙に気が合って二人で海外の氷河の或る山に登ろうかという話が出ていたからだ。私は１冊の山岳雑誌を開いた。「岳人」昭和41年６月号の「ヒマラヤの高峰90アララット」著者は深田久弥さん。掲載当時のアララットは日本人未登だった。私はキリマンジャロかこのアララット山に登ろうと提案した。すると彼は即座に「アララットに行きましょう」と答えた。何でだと思ったが彼には私以上にトルコ共和国への強い想いが有った。読書好きの彼は以前から「中央アジア踏査記」や「カラコルムを越えて」等の探検物を読みスウェン・ヘディンやマルク・オーレル・スタイン卿に憧れていたのだった。京都での彼は梅棹忠夫(京大名誉教授、民博館長)さんの「京都大学人類学研究会」に入会し松原正毅(民博名誉教授、坂の上の雲ミュージアム前館長)さん、等々の錚々たる方々に出逢いトルコ共和国遊牧民の調査研究に俄然燃え始めていた。とにかく深田久弥さんの御自宅を訪ねトルコの山の情報をお聞きする事にした。

昭和44年２月15日予め手紙で訪問のお許しを頂いていたので世田谷区松原町のお宅を午後２時に訪ねた。古い木戸門の左脇上に「深田」の表札を見つけた。スッとは開かないので鹿野さんに下側を持ち上げてもらい右にスライドさせて開けた。平屋建ての昔風のお宅だ。玄関までは何個かの踏み石を歩いたのを覚えている。今風のチャイムなどは無かったので玄関を開けながら「御免ください」と声を出すと直ぐに奥さんと思われる方が出てこられた。「岩手県宮古から来ました渡邊と鹿野です」と名乗ると「どうぞお上がり下さい」と言われ玄関から続く廊下を少し歩き左の八畳ほどの床の間付きの和室に案内された。大きめの座卓正面に座られた深田久弥さんが笑顔で立ち上がられ「遠い所からどうも」そして「お座りください」と言われた。深田さんは65歳、確か和服姿だった。大柄ながっちりとされた方でした。お顔は深田さんの著書に掲載されていたバーミャン大仏前で撮った写真を見ていたので鹿野さんも私もすぐに判った。座卓の上には隙間の無いほどに本が積み重なっていた。この和室が仕事場で「九山山房」と呼ばれる本小屋書斎は奥の離れのようだ。二人の自己紹介を済ませ早速に山の話に入った。「近々にアララットに登りに行く予定ですのでトルコ共和国の他の山々も含め山の様子とか地図や写真もお見せ頂ければとお伺い致しました」と話した。すると深田さんは立ち上がり奥に消え少しして

色々と抱えて戻られ地図が広げられお話が始まった。二人でメモを見ながら交通、物価、治安、気象等々に付いても具体的にお聞きすることが出来た。途中何度か席を立たれトルコの写真や資料を惜しげもなく見せて下さった。深田さんは終始笑顔でお話をされ我々を若い山仲間としてもてなして下さった。

佳境に入ったころ席を立たれた深田さんはグラスを３個とスコッチウイスキー瓶を抱えて戻られ二人にも注いで下さった。そしておもむろに「海外での登山には何かと役に立つので日本山岳会に入会してからお出掛けなさい。私が紹介者になりますから」と入会申込書を開いて説明して下さった。

気が付くと２時間が過ぎていた。深田さんに長居のお詫びと厚遇に感謝申し上げお暇させて頂いた。松原の駅への道々のこと鹿野さん曰く「スコッチが凄く旨かったです。三杯もお代わりしたけど渡邊さんは」と聞いてきた。「俺は二杯だよ」それ以後の彼はスコッチ党に成った。ボーナスが出るとアイラ島の調和のとれた「ボウモア12年」と「アードベッグ10年」を特にも愛飲していた。

昭和47年４月、鹿野さんは横浜港からシベリア鉄道経由でアルメニアからトルコ共和国へと一人で先に渡った。半年をイスタンブルで、その後アンカラの中東工科大学の特別学生として在籍。更に農村調査研究の活動をしながら「早く来てくれ」そして「自分の登山靴を忘れた、あれも忘れたこれも無い一緒に持って来て」と矢の催促だ。私は慌ただしく同行のもう一人を連れ昭和48年６月やっと日本を出た。中央アナトリアのエルジェス山(3916m)に登り、黒海沿岸のカチカル山(3937m)は最奥のアイデル村まで入ったが雨が続き登路の偵察だけとした。愈々向かったアララット山(5165m)は急に隣国との紛争が生じて登山は禁止(ヤサク)と麓の村で言われてしまった。アンカラに戻り何とか内務省と交渉したが駄目だった。然し「日本山岳会会員」が役立ち第二の高峰シュプハン山(4434m)の登山許可を貰え無事に登頂出来た。鹿野さんはその後にも３度もトルコに渡った。彼の職業は高校の地理と世界史の先生だ。山を愛し世界を旅した彼の授業はきっと生徒に大人気だったことだろう。教室での彼の声や生徒の笑顔が今にも浮かんでくる。彼の好きだった言葉「未知を求め　遠く旅する者に　神はそのパラダイスを開く」。もっとやりたい事がいっぱいあったろうに何でこんなにも早く逝ってしまったのだ。

まだまだ書き足りないがこれでお許しを願う。故人の略歴を記しご冥福を祈りたい。合掌

(令和３年９月記)

鹿野松男さん略歴

昭和22年8月	宮城県塩釜市に生まれる
昭和38年4月	宮古高校山岳部入部
昭和41年4月	竜谷大学経済学部入学
	この頃、京都大学人類学研究会入会
昭和47年4月	トルコ共和国登山と調査研究
昭和53年8月	第2回トルコ東欧社会調査
昭和60年8月	黄河源流踏査行
昭和63年8月	第3回トルコ調査夫人同伴
昭和64年1月	ボルネオ島キナバル山登頂
平成20年3月	八戸工大二高定年退職
平成27年8月	第4回トルコ調査松原教授と
令和元年4月	日本山岳会永年会員

（ 2017年７月例会「アポイ岳」）

訃報　近藤有慶さん（86歳　会員番号7771）

近藤有慶さんは、令和３年12月奥州市でお亡くなりになりました、「この４月に86歳。あと２年で永年会員になる」と嬉しそうでした。

近藤さんは、つい昨年の例会山行に４月（六郎山～台羽山）、５月（砥森山）、６月（茅森山）、８月（サンボトジ頭）といつもおひとりで運転されて参加されました。

新しく入会したメンバーとも楽しげに交流され、「年取りましたわい」とおっしゃるものの、大変お元気だった姿が目に浮かびます。

そこに突然の訃報でしたので驚いてお伺いすると、秋ころ多少の不調を訴え病院で検査したところ、消化器に悪性の病気がみつかり不幸にも進行が早く回復できなかったとのお話でした。

謹んでお悔やみ申し上げます。

※写真は令和３年８月１日［サンボトジの頭にて］

編　集　後　記

高橋勇一

支部通信の編集に携わって、今回の54号で３度目となりました。当初は令和３年中の発行を予定しておりましたが遅れに遅れ、現在に至ってしまったこと、申し訳なく思っております。なお、素人編集のためレイアウト等思うようにいかず写真のページを挿入してみたりと、なんとかページを埋めようと試みましたが綺麗に編集することができません。行のずれなどもお許しください。

さて令和３年度もやはり新型コロナウイルスに翻弄された一年となりました。令和３年８月に開催予定だった山の公開講座も新型コロナの影響で、岩手緊急事態宣言が出されたため、県内の公共施設が閉鎖されてしまうという事態となり、開催を延期せざるを得ない状況となってしまいました。本来であれば会員全員に開催延期の案内を差し上げるところでしたが、参加申し込みのあった会員にのみお知らせいたしました。今回の支部通信を見て延期して開催したことを知った会員もいるかと思います。重ねてお詫び申し上げたいと思います。

今回の講座では私も講師の一人として参加させていただきましたが、私が担当したスマホアプリ「ジオグラフィカ」は説明用の資料が公開されており、言ってしまえばそれを印刷して説明するだけといった感じでした。しかし実際には限られた時間の中で説明する必要があり、資料のどの部分をどのように説明したらよいかなど、実際に講習会を開催してみて、なかなか労力のかかることだと感じました。今回講師を務めた澤口さん川村さん資料の準備など大変だったと思います。

（沢登り講習会での一コマ）

岩手県山岳・ｽﾎﾟｰﾂｸﾗｲﾐﾝｸﾞ協会による各種講習会も悪天候や新型コロナの影響により中止となったものもあり、思うように講習を受けることが出来なかった１年だったと思います。

そんな中ではありましたが令和３年度、山岳コーチ１（旧山岳指導員）の資格取得を目指して取り組みました。指導員を目指そうと思ったきっかけや、これまでの取り組みについては次の機会に報告できればと思います。

山行の一コマ📷

４月、岩手支部の例会山行スタート

岩手山避難小屋当番に向け岩場を登る

四角岳、北東北三県を股に掛ける

千沼ヶ原にダルマ？(；゜Д゜)

片羽山、山頂　晴れ渡る青空

藪漕ぎ大好き♡